

教育講演②

「東西文明の交錯と融合～ファシアと医学・科学のパラダイムシフト～」

弘前大学医学研究科総合地域医療推進学講座 講師
一般社団法人日本整形内科学研究会 副会長（学術局長）
株式会社アカデミア研究開発支援 代表取締役社長

小 林 只

現代医学は、西洋医学的な部分観・構造学と東洋医学的な全体観・機能学という二元論的アプローチが並立してきた。約 800 年周期で生じる東西文明の交錯お時代とされる現在において、約 4000 年の東西科学の交錯を例示しつつ、これからの医学の在り様とを提案する。

本講演ではまず、科学史における認識論的転換の事例（数学史におけるゼロの概念の受容、文化による虹の色の認識差など）を援用し、新たな科学的知見が既存のパラダイムを乗り越え受容される過程には、「認識→証明→枠組み→受容」という段階と、それを促進する明確な「概念」提示の重要性を示す。医学分野における Fascia（立体網目状の線維性組織）の再発見と ICD-11 への収載は、まさにこのようなパラダイムシフトの一例と言える。

さらに、AI、IoT、個別化診断・治療機器といったテクノロジーの進展が医療にもたらす変革にも言及する。これにより、従来の集約型医療から分散化・個別化医療への移行が加速し、エビデンスのあり方も大規模研究中心から AI が支援する個別症例報告重視へと変化する可能性、そして「安全・安心・簡単・軽量・安価」な医療への志向が強まる未来を展望する。

医学的事例として、Fascia を中心とした具体的な医学的アプローチを提示する。自律神経疾患などを例に、Fascia への介入（ハイドロリリース、鍼治療、徒手療法）、栄養療法、呼吸法、エコーを用いた評価などを統合的に捉える視点を示す。特に、組織を「緩める」治療と「固める」治療の戦略的使い分けや、Dry needling による Fascia 内受容器への刺激、さらには呼吸法や声の響きを利用した Mechanotransduction を介したファシアへの振動刺激といった、東洋的知恵と現代科学を結びつける治療法の可能性を探る。

既存の常識に挑戦し、新しい概念や枠組みを創造する柔軟な思考と学際的なアプローチが、対立構造ではない、多職種連携と医療・ヘルスケア分野における変革への一助となることを期待する。